

『言語四種別考』から『言語四種論』へ

古 田 東 朔

はじめに

この小稿は、鈴木朗の『言語四種論』の書誌的な点について考察しようとするものである。

これについては、すでに岡田希雄氏の精細な論文「神宮文庫本活語断続譜の筆者に関する疑問」(『国語・国文』昭和十二年九月号)がある。岡田氏は、その中で、現京大図書館所蔵の伴信友筆写本について紹介されるとともに、合わせて神宮文庫所蔵本、文政七年刊本、柳園叢書本の諸本の内容を、それぞれ比較検討され、

信友本と刊本との中継と成るものが神宮本であり、信友本を訂補して神宮文庫本成り神宮本を訂補して刊本と成った事を示すものである。

と述べられたのである。そして、柳園叢書本は、神宮本と刊本との間にはいるべきものであるとされた。とすると、朗の考えがどのようになら展開していったかは、この順序に従って見ていかなければならぬわけである。

しかしながら、この後、名古屋の岡田稔氏の所蔵に帰した一本がある。信友本が朗の初稿本のありさまを示しているものであるとす

れば、この岡田稔氏所蔵本は、神宮本と同じく、朗の再稿本のありさまを示しているものである。ここでは、まず、その岡田本の位置づけと、神宮本との比較により明らかになることがらについて考えたいと思う。

さらに、右の岡田希雄氏の論文では、柳園叢書本を刊本の前に置いておられるが、私は必ずしもそれについて従うことができない。むしろ、刊本の後に置いて考えるべきだと思っているのである。もと刊本と柳園本の差はそれほどなく、些細な問題なのであるけれども、そのことについても一応明らかにしておきたいと思う。

一 神宮本と岡田本

岡田稔氏所蔵の本は、氏が昭和十六年夏入手されたものである。

この書の概要については、すでに山田孝雄博士が『国語学史』の中で紹介されたことがある。これは、活語断続譜・言語四種論(ただし、外題・内題ともにない。かりにこう呼ぶ)・言語音声考(後に刊本では雅語音声考)が、この順序で合冊されているものである。最後の音声考の末尾に、

享和三年亥六月

鈴木朗

の奥書があり、次の丁の初めには、

文政二年卯八月朗主自筆の本を

紀の藤垣内翁よりかり得てうつし畢ぬ

千 楯

の奥書があるものである。これによると、朗自筆の本が本居大平のもとに送られており、それを城戸千楯が文政二年八月に写したものであることがわかる。——しかし、これが果たして千楯自筆のものであるか、それとも、それをまた写し（ていつ）たものであるかは、私にはわからない。だから、千楯とは呼ばないで、一応岡田本と呼び、文中区別して使用することがある。

岡田本には、文章の脱落している箇所がいくつかあるが、それにして、ある面ではかなり忠実に写しているものと判断される。脱落の主要な箇所とは、神宮本と比べた場合、断続譜の「此ニ等ワクルニオヨバズ一ツニスベシ」（これはあるいは後人の書き入れかも知れないが）、「テツヌニツヅク」、後で述べる四種論中の二行の文章、「トモニ驚キ嘆ク声也」「ヤヨ」等である。この脱落を除いたその他の部分は、だいたい共通しているのであるから、神宮本と岡田本は互いに同じものを写していったものと見て差支えない。

この書の出現によつて明らかになったことは、

1 音声考の再稿本のありさまについてうかがえること。すなわち、岡田本音声考は、信友本音声考と刊本音声考との間にはいるものである。神宮本には音声考はなく、断続譜と四種論（ただし、書名はない）だけの合冊であるから、岡田本はその不備を補うことができる。

2 神宮本の誤りや脱落を正すことができること。（特に断続譜に

おいて。）

3 神宮本は大平の手もとにあった本ではないこと。

4 神宮本と対照することにより、大平の手もとにあった本、さらには、朗の原本の形が、ある程度推定できること。

などである。中でも、1の点において意義があるものと考えられるが、それについては別に音声考だけについて見ていく予定なので、ここでは省略し、以下3と4の点について見ていく。

まず、3の神宮本は大平の手もとにあった本ではないことについて。かつて酒井秀夫氏は「神宮文庫本活語断続譜について」（『国漢研究』昭和十一年六月号）において、当時名古屋図書館に所蔵されていた朗自筆の『医事卮言』（文化五年）の書体と比較されて、神宮本は朗の自筆であろうと推定された。そして、さらに、この神宮本も「大平に送つて訂正を依頼したものではなからうかと思はれるのである。それが後に弟子の弘訓の手に入つたものではなからうか。」と述べられたのである。（ただし、岡田希雄氏は、これに対し、前掲論文で、神宮本には少なくとも二つの違った書体が認められるとされて、『断続譜』のハジガキと本文及び押紙四種論全部を人に書かしめ扉と其の書入れ、及び追考だけを自ら書き込んだのではあるまいか』と疑ふのである。）と述べられた。）

しかし、神宮本は酒井氏のように大平本だとはいえない。もし、そうだと仮定すれば、岡田稔蔵氏蔵本には千楯が大平本を写したと奥書があるのだから、千楯本（あるいは岡田本）は、神宮本を写したものだということになる。

しかしながら、神宮本に脱落している文章が岡田本には存してい

るのである。すなわち、神宮本はその断続譜のほうの三等の最後の欄外の文章が、

又此等ノツミク詞ノ一クサノナリト云モ外ノ詞ニハアラズニアリ
ノコ、ロナルガ

となっていて、以下が欠けている。これに対し、岡田本のほうは同じ箇所が、

又此等ノツ、ク詞ノ一クサリノナリト云モ外ノ詞ニハアラズニア
 リノコ、ロナルガ語勢ノコトノミナル皆証トスヘシ

となつていて、完結している。しかも、この完結している箇所は、後に刊行された柳園本断続譜のほうでは、

ニアリノ心ナルガ語勢ノコトナルノミナリコレ皆証トスベシ

となつていて、違つた文章なのである。だから、別にそうしたものによつて補つたとは考えられない。(そして、このことは、岡田本が千楯本であつても、それをまた写したものであつても、同様にいえることである。)

まだ、このほか、神宮本四種論のほうでは、

僻事クシワザノ万ノ名目也（体ノ詞ノ事）

とある部分が、岡田本のほうでは、

僻事ノシワサノ万ノ名目ナリ

となつて、これは信友本でも同様に「ノ」である。(柳園本にはこの箇所はない。)もし、神宮本を写したのなら、このようにはならないはずである。

これらの点から考えると、千楯本は神宮本を写したのではなく、別の本を写したのである。すなわち、神宮本は大平本ではない。結

局、酒井氏の推定には従えないことになるのである。

だとすると、神宮本は、(1) 朗から大平以外の別人に送つたもの（あるいは、それをさらに写したもの）か、(2) 大平本を写したものの、のどちらかになる。右にも、少しふれたところであるが、ここで千楯の写した本を千楯本と呼ぶと（その場合、いうまでもなく岡田本は千楯本であるか、あるいはそれをまた写していったものであるか、のどちらかである）と、これらの関係は次のようになる。すなわち、(1)の場合では、

(1) 朗
原
本

├── 神宮本

└── 大平本 ── 千楯本

(2) の場合では、

(2) 朗原本—大平本—
神宮本 千楯本

である。（ただし、神宮本の上にさらに他本がはいる可能性はある。）

しかし、この場合、(1)と普通に見るべきだろうが、正確にはどちらとも言えない。神宮本が朗自筆かどうか、名古屋図書館の『医事卮言』が焼失している現在、両書を比較してみることはできないけれども、まず酒井氏の述べられたことについて見ることにする。氏は、

本文と書入れが同筆であるといふ事は、一見して推し量られる事であるが、「シ」の第二点から筆をつづけて次に移る処、「タ」の終の点が比較的長くはみ出る処、「子」の字、「せ」の字など

に特徴があり、是等の特徴から考へても同筆だと思はれる。

さて両者（神宮本と『医事卮言』）を比較してみると、全体の印象が酷似してゐる。くづし書は割合に達筆であるが、かたい文字は上手とは言へない。両者共筆に力の無いなぞる様な書き方である。そして前に挙げた「シ」「タ」「子」「せ」などの仮名の特徴も一致する。その外「時」を「寸」と書く事も同様である。かやうに考へて私は神宮文庫本活語断続譜は、朗の自筆であらうと推量するものである。

と述べられた。朗自筆だとされるのである。

ただし、これについては、右にあげた岡田希雄氏の説、「一筆で書かれたかどうかは疑はしい、しかし誤字もあるから、朗の自筆であるか何うかも疑はしい。」という意見を考慮に入れるべきである。なお、それに加え、私は、酒井氏の述べられた「子・せ・寸」などの用字は、岡田本でも認められるのであるから、朗自筆ということの直接の証拠にはならないと思う。ただ、「シ」と「タ」に關することは、神宮本と岡田本にも一応認められるところではあるが、別人の写した岡田本にも認められるということは、朗の特徴とだけは言えなくなる。朗の特徴がそこにも示されたのかも知れないし、あるいはその別人の特徴なのかも知れない。——ただし、他の用字のほうは、『医事卮言』にも同様の特徴が見られるとしてあるのだから、別人が写す際にもその朗自身の筆くせが示されたものと解すべきであらう。

だとすると、右にあげた(1)、(2)の二つの場合については、明確にはどちらとも断言できないことになる。しかし、強いてどちらかと

いえば、岡田希雄氏も一応一部分は朗の自筆と酒井氏に従われたように、『医事卮言』の見られない現在では、酒井氏の推定に従うべきであらう。だとすると、(1)のほうということになる。つまり、このことを言いかえれば、朗は自筆の再稿本を一部自分で写すか、あるいは全部自分で写すかして、大平のもと（大平本）、また某のもとへ送り、批評を乞うた。大平のもとにあった本は、のちに城戸千楯が写した。某のもとにあった本は、のちに足代弘訓の蔵、その後神宮文庫の蔵に歸した（あるいは弘訓のもとへ送ったのかも知れぬが、それにしても弘訓の年が若いように思われる。）ということになるのである。（そして、(2)の場合では某のもとへ送ったということとはなくなる。）

次に、神宮本と岡田本を比較することによって、(1)、(2)の場合とも、大平本から引いては朗再稿本の形態や、文章について、ある程度推定することができる。すなわち、それらは次のようである。

1 大平本、朗再稿本四種論の字詰は、だいたい二十五字前後であった。

これは、次のような点から推定できる。すなわち、岡田本四種論のほうには、次の傍線の箇所脱落がある。例文を神宮本四種論の文章で示すと、

(1) 体ノ詞ナルガ多クサアラヌモ モハラ 全体ノ詞ニ同シ理リ也然レバ
体ノ詞ニ

(2) カノ形状ノ詞ヲモ一ツニ用ノ詞トイヒ来レルハ少シイカミ
アリカタ
ニテノ形状ハ

のようである。この中、(1)のほうは「体ノ詞」、(2)のほうは「形

状」という語が、並んだ二行のほぼ同じくらいの箇所にあったため、目うつりして、次の行へとび、一行前後の脱落となって現われたものと考えられる。(1)では二十六字、(2)では二十七字で、ほぼ等しい。

同様のことは、神宮本のほうでも言える。ちょうど(2)の同じ箇所であるが、そこでは「ニテノ形状ハ」となっている。この「ノ」は、信友本、刊本の文章などと比べた場合、明らかに衍字である。どうして、こんな所に「ノ」がはいってきたのか。岡田希雄氏はカノソノの誤記かとされたが、そうではなく、恐らくこれは、前のほうの「カノ形状ノ」とある部分の「ノ」が、同じ「形状」という語のすぐ上にあるため、一行の目うつりからはいってきたものである。この間二十六字。右と比べてほぼ同じ字数である。すなわち、これから考えて、一行の字詰は二十五字前後であったらうと推定できるのである。(ただし、神宮本が大平本を写したのなら、これは朗の原本まで及ぶかどうかは分らない。以下も同様の箇所がある。)

2 大平本、朗再稿本中には、恐らく次のような誤記その他が存していたであろう。

岡田希雄氏は前掲論文で、神宮本中の誤字・誤写と思われる二十四箇所を指摘されたが、それを岡田本と比較すると、以下のものは共通している。()で示しているのは、信友本・刊本で補ったものである。

- (1) 物(ノ脱) アハレヲシルノアハレ(体ノ詞ノ事)
- (2) サレバコノシリノニモジ(ニ脱) テトマル詞ハスベテ皆事ノ

アリカタ
形状也 (形状ノ詞作用ノ詞ノ事)

- (3) ヌテニヲハノ(メの誤) 貫連ネ使ヒ動メ万ノ詞トナル(テニヲハノ事)

- (4) コレヲ(ラの誤) 三種ノ詞ノ類ニアラズ(ク)

- (5) キハシトウゴク形状ノ詞ノシトキルハツヅクウラウヘナリ

(ク)

右のうち、(1)(2)(3)は明らかな誤脱であるが、(4)のラをヲとしているのは、神宮本が朗の送ったものであるなら、あるいは朗自筆の筆くせであったのかも知れない。(岡田本のかたかなの誤写を神宮本のそれと比較すると、シーレ、コージュ、スーヌなどがあげられる。シーレは酒井氏の述べられたところに共通するけれども、これは同じ文章のところではないから、朗自身の筆くせかどうかは何とも言えない。同一の箇所はこの(4)だけである。)また、(5)については、岡田氏は「キル、は此所に書く必要は無い筈である。」と述べられた。しかし、これは助動詞キと形容詞語尾シの終止形・連体形がそれぞれ逆だと言っているところであるから、意味上から言っても、誤りではなく、これで正しいと認めるべきである。(この(5)はいずれの場合にせよ、朗原本でもそうであったらう。)

神宮本と岡田本を比較した場合、以上の点が考えられる。これは、大平本、引いては朗再稿本の形態・文章に関し推定されるところである。今後それらの本が発見されることがあるかどうか分らないが、もし発見されることがあれば、少なくとも右のような特徴は必ず有しているものであろう。

岡田氏は朗について、

朗はかなりに軽卒な人間であつたと思ふ、と云ふのは、此の写本が他人に写させたものであるにした所で、斯う云ふ不完全な写本を、批判を乞ふために、人に送つた事は事実であるからである。

と述べられたが、岡田本と比較したとき、そのことはさらに確実性を増す。朗は自著に何度も訂正を加えるような丹念な人間であつたが、一方かなり無頓着なところもある人間であつたと言わざるをえない。祭礼に書店の永楽屋から招かれた折、同家に幕を引き廻していたため探し当てる事ができなかったなどの話が伝えられているが、そうしたところにも性格上の共通したものがうかがえる。

二 柳園本の位置

柳園本とは、『柳園叢書一』として、江戸の柳河春蔭(春三)によつて刊行されたものである。言語四種論・活語断続譜が、この順で合冊されている。

まず、この書の刊行年について見る。これは漠然と幕末あるいは明治初年とするのが通説であるが、別に明らかに刊行年を指定しているものも存している。すなわち、通説としては、山田孝雄博士が、初めは『国語学史要』で「その年月未詳。幕末の頃か。」とされ、後には『国語学史』で「その年月詳かならず、明治の初頃ならむか。」と述べておられる。また、岡田希雄氏は前掲論文で、「刊年は不詳、但し刊記の広告文に洋学に関する書名が多いのを見ると幕末頃かとの推定が可能である。」と述べられる。

しかし、すでにこれらの諸著書・論文以前、『日本文学大辞典』の尾佐竹猛博士が執筆された「柳川春三」の項では、この『柳園叢

書』をあげ、慶応三年のものとしていのである。これは、これ以前大正九年の同博士の『新聞雑誌柳川春三』(名古屋史談会)においても、年譜の慶応三年の所に、同様にこの書をあげておられるところである。

しかしながら、これについては、別に何によられたものか証拠が明示されていない。私の見た範囲では、慶応三年か四年の刊行と思われ、まだどちらとも一方に断定できない。すでに明らかなることも知れないけれども、一応私の考えを提出しておく。

柳園本の巻末には洋学に関する書籍の広告文があげられているが、ここにあげられている書名の中では、『洋学指針 英学部』が最も刊行年の下るものであり、慶応三年の刊(巻首に同年二月の篠崎隆由の序文がある)である。だから、柳園叢書も同年以後の刊と考えられる。

しかし、四年の刊と考えられないこともない。右の『洋学指針』のほうの広告文には、別に柳園本の名が見えないから、恐らくこれよりは後であろう。そして、慶応四年二月の『西洋雑誌・巻五』の終りには「柳河先生著述目録」というのが掲げてあるが、それには「柳園叢書 追々出来」とある。これは「何冊・追々出来・近刻」という順序であげているものであるから、四年二月に近い時に出されたとも考えられる。また、同四年五月十一日の『中外新聞・第三十五号』には、

柳園叢書の内 言語四種論、活語断続譜 合一冊
戦地急構保砦新論 初編二冊 近日発売

とある。「近日発売」は前の行にかけて解することもできるのである。とすると、四年の可能性もあるように思われる。だから、この

書は、一応慶応三年か四年かの刊行と考えておく。

しかし、『柳園叢書』には明治になってからの後刷本も存する。このほうは見返しが違い、その上欄に「明治二年七月官許」とある。また、巻末の洋学関係書籍の目録がない。内容は同じ板木を使用しているものである。恐らく前に出したものを、二年五月の出版条例に従って官許を受け、再び刊行したものであろう。

次に、文政七年刊本と柳園本との関係について。この両書を比べたとき、そこに見られる主な違いは次のようなものである。

1 柳園本には「言語ニ四種ノ別アル事」の項の最後に「○凡テ言ニ体用ノ別アリ……」という百字ほどの文章が、一字分下げて記してあるが、文政刊本にはそれがない。

2 柳園本には同じく「テニヲハノ事」の項の最後に「鈴屋翁曰一言ノウチニモ亦活用アリテ……」という三百八十字ほどの文章が、一字分下げて記してあるが、文政刊本にはそれがない。

3 柳園本には「体ノ詞ノ事」の最後のほうの文章「廿チ卅チ百チ千チノチ」のあとに「又子等何ガシ等ノヲ」という語句があるが、文政刊本にはそれがない。

4 柳園本には「テニヲハノ事」の中の「ケリメリハシラネドモ」とある箇所が、文政刊本では「シラレネドモ」となっている。

その他は、送りがな・ふりがな・傍線・誤写と考えられるわずかの部分である。『国語学大系・第一巻』は文政刊本を底本とし、柳園本で校合を加えたものである。異同は、それに詳しい。

ところで、岡田希雄氏は、この両者を比較されて、柳園本のほうが古いものであらうとされた。すなわち、

文政刊本にヲの項（右の3をさす）の無いのは著者が無い方が可いと思つて削つたものと想はれるのである。従つて柳園本の方が古き原稿で、文政本の方が定本的なものであらうと想はれる。

と述べられたのである。これによると、(1)信友本、(2)神宮本、(3)柳園叢書本、(4)文政七年刊本、という順序になるのであり、『国語学大系・第一巻』の『言語四種論』の解題なども、それに従つた説明をしている。

しかしながら、この柳園本と文政刊本との関係はいかなものであらうか。私はむしろその順序は逆であらうと思うのである。

岡田希雄氏は、右の1、2の一字下げの書き加え二箇所については、別にふれられてない。しかし、まず、それから問題にすべきであらう。右の1の部分は宣長の『古事記伝・三之巻』の「都芸」の語釈の箇所の文章を書き入れているものである。これは特に最後のほうの文章が誤つて写されているため、柳園本のほうでは意味の違つたものとなっているが、その文章を示すと、次のとおりである。

() の部分を除いたものが柳園本の文章、〔 〕の部分を除いたものが古事記伝の文章になる。（ただし、柳園本のほうはかたかな。）

凡て言に体用の別あり 体とは動かぬ〔言〕を（いふ）〔云〕用とは活（ハタラ）くを云（イ）フ其（ ）体語に本より体〔語〕なると用の体になれるとありいと上（ ）代には用語多くて体語すくなかりしを世に人の言語の多くなり（もて）ゆくまゝに用語の（分れて体語にもなれるが）〔別〕いと多くなり

また、2のほうは、最初に「鈴屋翁曰」とあることによつても明

らかなように、同じく宣長の『漢字三音考』の「皇国言語ノ事」の中の記事を書き入れているものである。

これからすると、1、2の二箇所の記事は、決して四種論の本文と同一視することはできないものである。一字下げで印刷されていることも本文とは違つた意味のものであることを思わせる。書き入れも一緒に印刷したものであることは疑いない。(柳園本では、断続譜のほうにも同じく『入衝』や『和語説略図』の名称の書き入れと一緒に印刷されている。これからもそのことは断定できよう。)だから、この二箇所の文章は一応本文から除外して考えるべきである。

次に、3の「又子等何ガシ等ノラ」という箇所であるが、これは文政七年より後、「文政十二丑二月有信写之」という奥書のある栗田貫一氏旧蔵の言語四種論(紐鏡と合冊、東大言語研究室蔵影写本による)に、同様に見られるところである。(これには右の1、2の文章はない。)しかも、それではこの語句を朱で囲んで、書き加えている。(割註の文章なども、同一行内で文政刊本のとおりの変え方をし、そこを朱で囲んでいる。)それから考えると、文政刊本刊行以後に、それ以前のを筆写したとは、まず言えないであろう。むしろ、この3は文政刊本以後に書き加えたものと見たほうがよい。しかも、問題になるところは、この一箇所だけである。信友本(初稿本)、神宮本・岡田本(再稿本)には、いずれもこの箇所が「イクラ ソコラナド(神・岡ナドなし)ノラ」となっている。この箇所だけを一時「又子等何ガシ等ノラ」と書きかえ、さらに刊本の折に削ったと見るよりは、「イクラ ソコラ……」を削つ

て刊本の文章とし、その後、恐らくその刊本に朗か後人がまた「又子等……」を書き入れたと見るほうが妥当である。

さらに、4の「シラネドモ」と「レ」の欠けているのは柳園本の誤脱であろう。もつとも、これには稿本がどのように訂されていたという可能性もある。しかし、それならそれで、刊本がその「レ」をまた復活したとは考えられない。つまり、刊本が後だとは言えない。——しかし、この箇所は、これだけでは明確でない。やはり、柳園本を板にするときの誤脱と見るべきであろう。

以上のように見てくると、柳園本は決して文政刊本以前のものは断定できない。むしろ、その逆に見たほうが妥当であろうと考えられるのである。つまり、私は、

- (1)信友本 (2)神宮本・岡田本 (3)文政刊本 (4)柳園本

と見るべきではないかと考える。

この柳園本の四種論のあとには「右以鈴木先生自筆稿本写之了」という文章も一緒に印刷されている。柳園本は断続譜のほうも書き入れを印刷してしまっており、そのため、後人の朗に対する評価を長く誤らせたものである。その意味では、決してよい翻刻であるとはいえないけれども、この奥書に関する点は一応信用しておいてよからうと思われる。

春三は朗の門人であつた丹羽勘、神谷簡斎、上田仲敏などに学んでいる。断続譜のほうに「○○仲敏云」の書き入れが見えるが、岡田稔氏の御教示によれば、これは上田仲敏ではないかとのことである。これらのことを考えるとき、仲敏の手を経たものを春三が板にしたのではないかと推量されるのである。

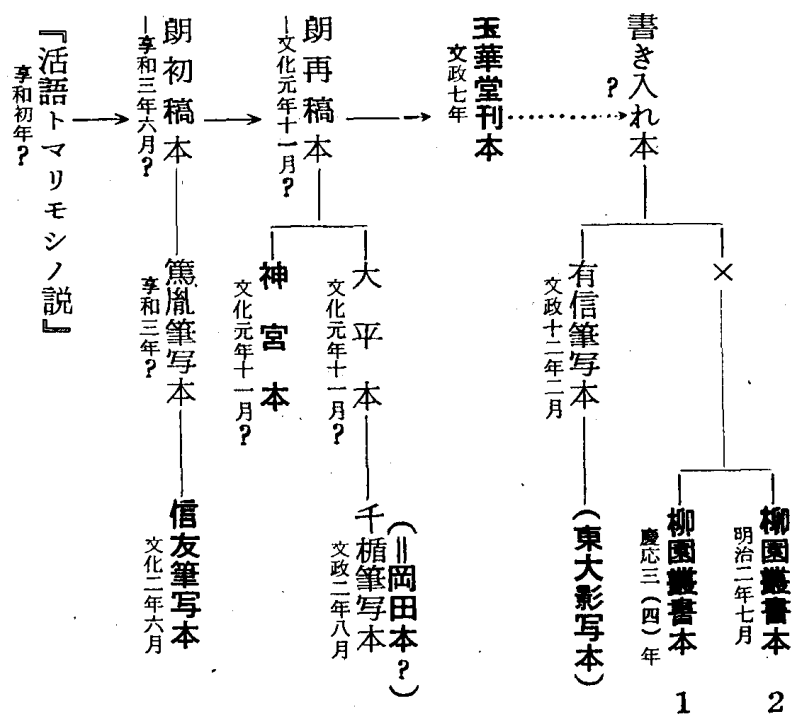
そして、このことは幕末期、なぜ彼がわざわざ朗の二著をもう一度刊行したかということと関係する。岡田希雄氏は、この柳園本について、「刊行者は文政の刊本のあるのを知らずに刊行したものかと想はれる。」と述べられたが、そんなことはなからう。恐らく名古屋（玉華堂版）で出版された文政刊本の存在を、同じ名古屋で生まれ、しかも数名の朗の門人に教えを受けた春三が、そのことを知らなかったはずはない。その理由はむしろ別のところに求めるべきであろう。

私は、その理由は、当時の洋学の風潮と、それに対する彼の国語重視の考えとに存しているのではないかと思う。慶応末年といえ、洋文法の概要も相当紹介されている時期であり、その立場から国語の文法についても考えられてくる直前のころである。たとえば、右の彼自身の著『洋学指針 英学部』にも、すでにその傾向は見る事ができ、そこに述べる英文法に關することがらをそのまま国語に当てはめれば、直ちに古川正雄や田中義廉の文典に示されているような記述となる。とすれば、このような時期において、洋学者ではあるが国学者にも学んだところの彼が、国学者中にも、すでにこのように国語の類別を行い、活用語の研究を行っているところの書をすすんで紹介し、一般の参考に供しようとしたと考えられるのである。かつて刊行されたところの四種論を、もう一度印刷したところには、このような理由が存していたと思う。

三 『言語四種別考』から『言語四種論』へ

以上、朗の言語四種論の諸本についてながめてきた。それらをま

とめてみると、だいたい次の表のようになるであろう。（神宮本は一応朗自筆の場合として扱った。）



ゴシックで示したのが現存のものである。訂補が加えられていた順を左から右へ実線の矢印で示し、不明のところは点線の矢印で示した。『活語トマリモシノ説』は、かつて石田元季氏が「鈴木離屋」(『国語国文の研究』昭和三年十二月号)で紹介されたものであり、言語の四種の別に関する朗の考えを示す最初のものであるが、いわば覚え書き的なものであるから、ここでは初稿本とは呼ばな

った。諸本の書名は、初稿本が『言語四種別考』（信友筆写本題箋、内題なし）で、再稿本は不明（神宮本・岡田本ともに、外題内題なし）、玉華堂刊本以後が『言語四種論』である。

成立年・刊行年・筆写年は、その本の左に小さくしてある。その上に―をつけてあるのは、それ以前の意味である。疑問のものには？をつけたが、少し説明を加えると、『活語トマリモシノ説』については石田元季氏の推定に従った。朗初稿本については信友本の合冊の音声考末尾に「享和癸亥六月」とあるのによる。篤胤の筆写したのも、その奥書に「この書は草稿のまゝなるを朗ぬしより直。かり得てうつしたるなり、平篤胤」とあるところによつて、恐らく同年であつたのだろうと考える。朗再稿本については、拙稿『『活語断続譜』成立時期私見』（『解釈』昭和三十四年二月号）で推定したところである。（なお、ここにあげたもの以外蛇足を加えれば、『国漢研究』では、柳園本を二度翻印している。また、右にも見たように、『国語学大系・第一巻』では、文政刊本を底本とし、柳園本でもって校合を加えている。）

『言語四種論』に関する書誌的な考察は以上で終る。その何度かの訂補を通じて朗の考えがどのように発展していったのか、そして、一方で朗の分類は成章の考えに示唆を受けたものとも言われているが果たしてそうなのか、それらの内容に関する問題は、また別の機会に考えてみたい。

追記 諸本を見せて頂くに当っては、倉野憲司博士、北西鶴太郎教授、遠藤嘉基博士、神宮文庫、岡田稔氏にいろいろ便宜をはかって頂いた。特に岡田稔氏には御教示頂いた点が多い。記してお

礼申し上げます。

― 前本学助教授 ―